

一九六八年（掲載誌、発行元不明）

## 仕事にうもれてこそ勉強はできるものだ

日本生産性本部プログラム教育研究所長 矢口 新

### 遊ぶ時間の意味

若いころ私は、勉強することといえば、まず本を読むこと、もう一つは、学校へ行つて授業を受けること、講義を受けることだと思つていました。

高等学校へいつて——それは、いまから三十五、六年まえのことだから旧制高等学校のこと、今の小学校六年、中学校五年をへて高等学校へ入る——何かの機会に教授から「君、勉強というのは、遊んでいるときのほうが、ほんとうの勉強になるのだよ」といわれました。いまから思えば、よくわからないところもありましたが、「ハッ」と思ったものです。遊ぶ時間の大切さは、それから私の頭にこびりついてはなれません。

いまにして思えば、その教授は私の恩人で

あるとしみじみ有難く感じています。私も若いころでしたが、ときには脱線して、相当に遊びましたが、それを時間のむだとは決して思いませんでした。

### 生活のすべてを大事に

このような生活をふりかえつてみますと、いまの私を育ててくれたものは、どうも「学校の授業」よりは、友だちと何かをやったり、旅行したり、しゃべったりしたことのほうが大きな力となっているように感じられます。

私の生活のすべてが、私をつくってくれたのであって、そういう意味で「一寸の光陰を軽んずべからず」という教訓は価値があったと思つています。いまの若い人は、こういうことばを知らないでしょうが、ことばはどうでもよく、要は実感であるはずです。

スポーツも好きでしたからよくやりました。麻雀なども私の若いころから流行しはじめたもので、夢中で徹夜などもしばしばでした。そういうものでもおぼれることがなかったのは、教授の「遊ぶ時間は大切にしろ」ということばのためでした。

### 真剣にとりくむこと

当時の高等学校は、程度からいったら、今の大学の教養学部くらいでしたから、左翼の運動もなかなか盛んでした。そのころは、左翼思想を研究するというようなことは許されなかった時代でしたが、若い者は、みな真剣にとりくんでいました。夜を徹してひそかに語りあったものでした。

私は実践運動にのり出すほどの勇氣（？）はありませんでしたが、何かのきっかけがあればとびこんでいたかもしれせん。立場はちがっても、世の中のことに真剣になるという目を開いてくれたことでは、左翼思想も役に立ったようです。

当時の高等学校は、いまの高等学校にくらべると、一風かわった人物がいて、小説を書く人もいれば、音楽を志す人もいました。そのような人材のなかで、能なしの私は「なにか自分の才能を早く見つけなければ」と焦り

を感じたものです。

### 考える力を身につける

大学へは行って、いろいろの講義を聞きましたが、正直いって感激したことはあまりありませんでした。講義をノートにとつて、それでおしまいだという、どうもさびしいおもいのくりかえしでした。当時の大学一年の勉強は入門の講義というべきもので、学問のあらましについてオリエンテーションを受けるといふような時期でした。

生意気ざかりのころですから、講義内容はそれほどたいしたことはないなどと放言していました。それでもいくつかの講義はすっかり私を感激させたのです。

「講義内容をノートにとるだけでなく、私といっしょに考えるように」といって、ゆっくり資料を説明し、解明してくださった教授には何かひきつけられるものがありました。

何はともあれ「頭を練る、物を考える力を身につける」それがほんとうの勉強だ、ということを感じとりました。そのような講義があると、ほかの講義がおもしろくなくなるような結果になるのも事実でした。本を読んでも同じではないかと感じる講義も多かったという印象は、いまでも残っています。

### 事実が何であるかを考える

演習というのがありました。いまのゼミですが、テキストを使ってみんな読んでいくものです。これもただお義理に読んでいけばよいものもありましたが、活発に議論をおこない、いきつくところがないときもありました。

私は、いろいろな理論を——というよりも、へりくつをならべたて、友達とやりあっているうちに、教授が「君、なんといつても、事実が何であるかをつかんで、考えることが大切だ。ひとつひとつのことは何を言っているのか、よく考えなくてはだめだ」といわれたときは、胸にこたえました。このことは、その後、私を支配している根本の考えになっています。死んだことばをいくらつかってもむだだ、生きた事実なことばがついていかなくては……。

### 忙しい中での勉強

また、「静かなところで勉強したい」といったら、「君、勉強は忙しいところで、人びとの中で、もまれながらやるものだよ。俗界の中でやるものだよ。それがほんとうの勉強だよ」ともいわれました。これも、その後、一生私をささえてきたことばです。

学校での勉強は、ほんとうの勉強ではないというのがいまの私の感想です。高校あるいは大学を卒業して、実際の問題にぶつかり、現実をどう打開するかということのなかで、いろいろ考え、しらべ、失敗をして、どうやらきりぬけたところに、ほんとうの勉強があるようにおもえます。

### 初心忘るべからず

サラリーマン一年生となったときは、だれしも身がひきしまるものです。「初心、忘るべからず」といういいことばがあります。一年生のころの身の引きしまる思いを、その後何十年もちつづけられるかどうかで、その人の人生の豊かさはきまるでしょう。

「人生が豊かだ」というのは結局、初心であることなのです。初心のときが、その人のいちばん豊かなときです。そう思っても、人間はとかくルーズになりがちで、初心を忘れるものです。初心になって、ものごとによぶつかっていく。それがよい結果になったことは、数限りなくありました。

### 学校と社会のちがひ

学校時代は責任ある場に立たされず、教授のいうことがわかりさえすればよいという

受身の立場でしたが、社会はただ人のいうことがわかるなどという簡単なことではないのです。自分の目の前にある仕事を、**自分の責任で処理**しなくてはならないのです。とにかく、できなくてはならないのです。

それは動いている社会の「こまな」のです。学校ではそういう立場におかれたことはありません。そのような立場におかれたいのではなく、いまの学校の教育があまりまっているのです。

**社会の「こま」として働くとき、ほんとうに自力がつきます。自力のつみかさねこそ勉強**というものです。

自己啓発などということがいわれますが、そのようなことが特別にあるのではなく、生きて、働くところに、おのずから自己啓発があると考えるべきです。真剣に生きてゆくところに生きがいを感じ、そこから自己がひらかれていくのです。

このようなことが、初心をもちつづけるということなのです。仕事になれてくると、軽視しがちですが、それではその人はとまってしまう。初心を忘れない人は、どんな仕事にも奥深く探究してゆく態度をもつています。この態度こそ自己啓発の基本だということになります。つまり真剣に生き、真剣に

働くところに、自己の勉強があるのです。

勉強といっても、小手先の技術でなく、生きることであり、働くそのことなのです。これを忘れては、ごまかしの生活になってしまいます。ごまかしの生活におちこんで、後で気がついて、もうとにかえしのつかないものです。このようなごまかしをさけるには、自分がごまかしの生活をしないと、まわりの人にも、ごまかしの世界をつくらせないということです。

### 勉強とはどういうことか

勉強とか学習というものは、なにかのためにやるものではない。勉強することによって仕事をうまく処理しよう、あいつに負けないように勉強しようなどと考えがちです。動機はそうであってもよいでしょうが、実際にはそれで成り立つものではありませんし、長つづきするものでもありません。それでは仕事を他人に見せるために、カッコよくやろうということとなんらかわることはありません。先に言ったように、**仕事を一心にやっつくところに勉強がある**のです。ここがわからないから、なんとか真実をつきとめてやろうというような態度こそが、仕事に対する真実のすがたであり、そこに勉強とか学習すると

いうことが成り立つのです。

おもしろそうだからやってみようというような、あいまいな態度ではいつまでも自分が育ちません。自分に課せられた難題を探究し、解決していかうという態度をもつことこそ、その人間の成長があり、人生の豊かさもあつて、仕事へのいきがあるのです。

もし、どうしてもそのような態度がとれないなら、そのしごとをかわらなくてはならないでしょう。そうでなければその人は、一生を台無しにすることになり、それは自分のためにも、社会のためにもならないのです

初心をもって、それを忘れないでいれば、一年たったときのあなたは、興味と情熱をもって仕事をしていることでしょう。そうでなかったら初心を忘れて、屈服しているのだと思つてさしかえないでしょう。これは反省すべきことです。その反省すらできなくなっているのであれば、その人はすっかり墮落していると考えなければなりません。入社するときにもつた「初心」を忘れないければ、あなたはこれから四十年間、大変な勉強をすることになります。

### 企業への参加という意味

日本の企業は決して完全な体制ではない

と行ってよいでしょう。いや、大部分は、まだ未完成なものと考えられます。大企業であろうと、中小企業であろうと、大して差はないのです。その根本原因は、日本企業が明治以来、まだ百年しか経ていないということもあります。

そのような状態を完全化するのには、社員であるあなた方の探究心にかかっているのです。どこに真実のありかたがあるのか、あなたの仕事を通して発見しなければならぬのです。研究しなければならぬのです。

そして、それらを具体的にあなたの仕事の中で実現しなければならぬのです。そこまでもつてきてこそ、本当の勉強、学習があるといえるのです。だからあなたがいかに多くの本を読もうとも、人の話を多く聞こうとも、それがあなたの実践の場で、生かされなければ、なんにもなりません。

私たちの職場は欠点だらけです。それをすぐれた方向にもつてゆくのは、清新なあなたにかかっているのです。そしてあなたの周囲には、何十年先輩という人もいます。かならずしもこれらの人々が、完全な態度で仕事をしているかといえば、それは「NO!」ということさえもいえます。

あなたはこれらの人々が持つ良い点をと

りいれ、また悪い点はすてさつて新しい方向にもつていかなければいけません。このような状態にならないければ、日本はおそらく国際社会の競争で没落することになるでしょう。

若い力が、古いものの上に新しいものをうちたてるには、あなた方の真剣な仕事、真剣な探究が必要なのです。そしてはじめてあなた方は、本当の意味において、企業に参加できるのです。

そして、ほんとうの意味での企業参加をはつきり確認できた人は、毎日の仕事が大変楽しいものになるでしょう。